

論 文

小児看護に従事する男性看護師の実態 —看護管理者に対する質問紙調査から—

渡部 真奈美

目次

- I. はじめに
- II. 研究目的
- III. 研究方法
- IV. 結果
- V. 考察
- VI. おわりに

I. はじめに

1. 研究動機と意義

わが国の看護師に占める男性看護師の割合は、1996（平成8）年には2.7%であったが、2006（平成18）年には4.7%に増加しており、38,000人を超えている。2004年度と比較すると、20.4%と急増している¹⁾。病院に就業している男性看護師は、1996（平成8）年には約14,000人であったが、2004（平成16）年には約28,000人で2倍に増加している²⁾。従来、男性看護師の約半数は精神科病棟というきわめて偏った配置状況にあったが、近年多様な領域への広がりを示しつつある。看護師養成課程への男性入学者の割合は、1990年では1.0%であったのに対し、2002年では6.3%に増加している³⁾。これらは、高齢社会における医療・福祉職への志向や、男女雇用機会均等法の改正、男女共同参画社会構築、また第6次学習指導要領改訂における「家庭科の男女必修化」などに代表されるジェンダーフリー教育などが影響していると考えられる。

さて、入院している子どもには、発達段階や治療方法によって多くの専門職が関わる。医師や看護師といった医療専門職だけではなく、教育職（教師や保育士

など）や福祉職など多岐にわたっている。しかし、その割合は圧倒的に女性が多い。子どもの成長発達においては、母親の存在だけではなく、父親の存在も非常に重要である。特に、学童期や思春期の男子にとって、父親の「ロールモデル」⁴⁾ となることが期待されている男性看護師の存在は重要であると考えられる。

小児看護に携わる看護職者についての先行研究では、多くの看護職者が男性看護師の必要性があると考えていることが述べられ、入院中もしくは入院経験のある子どもを持つ父親と母親（保護者）を対象にした研究³⁾ では、男児をもつ保護者が男性看護師の必要性が高いと考えていることが述べられている。しかし、子ども自身が男性看護師をどのように認識しているのか、あるいは男性看護師はどのような認識で子どもにかかわっているのかを明らかにした研究は、わが国においても海外においても、見当たらない。

学童期や思春期の男児にとっては、羞恥心を伴うようなケアや精神面への支援といった部分においても、男性看護師あるいはそれに代わる専門職が存在することの意義は大きい。したがって、小児看護領域において、入院している子どものQOL向上のための男性看護師の役割と意義を明らかにすることは非常に重要であると考えられる。

本研究は、以下の3点において独創的であり、意義があると考ええる。

- ①小児看護領域において、ジェンダーに関する研究は未だ少数である。特に、

本研究で取り上げようとしていることの特色は、男性看護師自身、あるいはケアを受けている子どもの立場から、男性看護師の役割と意義を明らかにしようとするところにある。

- ②医療現場における患者と医療者とのかわりを、看護という領域だけではなく、近接領域といわれている心理学や教育学、さらには社会学の領域から、教育や他の保健医療専門職の動向を踏まえ、比較しながら検討していくことに特色がある。病院や施設といった限定した環境でありながらも、そこはひとつの文化や社会を形成しているという観点からも分析を行う。
- ③男性の看護師はまだ少数派であり、男性看護師を取り巻く状況は困難なことも多い。少数派であるが故の困難、女性職に入る男性固有の困難、そして、看護というものが身体接触を伴う仕事であるために生じる困難などが考えられるので、これらの点についても、検討を行う。

2. 文献検討

1) わが国における男性看護師をめぐる歴史の変遷

本研究の開始に先立って、男性看護師の歴史的な変遷について文献検討を行ったので、その結果について述べる。

わが国の近代看護における男性のかかわりに関する専門的な研究は少ないが、男性看護職¹⁾の近代史を紐解くと軍との

関係がでてくる。戊辰戦争後の1868（明治元）年に設立された大病院では、当初負傷兵の看護に男性の看病人が対応していた。その後、陸軍関連施設で看護要員が必要とされ、看病人・看護手・看護卒と称される男性が看護にあたった⁶⁾と述べられている。

もう一方で、男性看護師は精神障害者への看護に密接にかかわっていた。明治初頭より、問題のある精神障害者が隔離される中、1879（明治12）年に設立された東京府癲狂院では、精神障害者への食事等の世話や、時には暴れる患者に対して力で押さえつけるなどの役割を「救助人」と呼ばれる無資格の男性が担っていた⁷⁾。

1874年に医事制度が制定されて以来、続々と看護婦養成所が設立された。また、看護職の法整備もされ、1899（明治32）年には産婆規則、1915（大正4）年には看護婦規則が公布された。看護婦規則は、近代以降初めての全国的な看護制度であるが、男性看護職はその附則の中で「准看護婦及び男子タル看護人ニ対シテハ本命ノ規定ヲ準用ス」とされた。その流れは保健婦助産婦看護婦法（以下保助看護法という）へも引き継がれた。

1948（昭和23）年、保助看護法が制定された。保助看護法においても男性の看護人については、「この法律中、看護婦または准看護婦に関する規定を準用する」とされた。その後、1968（昭和43）年の保助看護法改正で看護師・准看護師の名称に変更されるまで男性看護職は看護人と称された。

1989（平成元）年、保助看護法・看護婦等学校養成所カリキュラム改正により、男女による区別が廃止され、男子学生も産婦人科実習を行うようになった⁸⁾。1993（平成5）年の改正で初めて保健士資

¹⁾用語の定義 看護職：保健師・助産師・看護師の総称（歴史的記述では看護に携わった職業人を含む）
看護者：看護師・准看護師の総称

格が認められた。2002(平成14)年3月、看護婦・看護師の名称が「看護師」に統一され、男女による名称の区別が廃止された。

以上のように、近代以降、わが国では軍との関係の中で男性看護職が誕生した。しかし、看護は一貫して女性中心の職業であり、男性看護職は、法的には女性看護職の付随的なものとして位置づけられ、教育、資格、職域において、常に規制を受けてきた。

2) 男性看護師に関する研究

男性看護師に関する研究の動向をみると、1980年代後半以降、さまざまな規制を受けてきた男子学生に焦点をあてた研究^{9)~11)}が行われてきた。

2000年以降では、男性看護職の現状や諸問題について、ジェンダー研究者¹²⁾あるいは歴史研究者¹³⁾などによる研究がさかんに行われるようになってきた。男性看護師の立場からの研究や提言も発表されている。前田ら¹⁴⁾は、小児看護に携わる看護師を対象に質問紙調査を行っている。その結果、男性看護師の必要性を多くの看護師が感じており、特に学童期以降の児に対して男性と女性の看護師では役割の違いがあり、両性でかかわる必要性を感じていることも明らかにしている。また、男性看護師と共に働いた経験のある女性看護師のほうが、経験のない女性看護師に比べて有意に強く必要性を感じていることも明らかにしている。さらに、第2報¹⁵⁾では、「男子としてのモデルの役割」が男性看護師に期待されていると報告している。

2002年に名称の改正が行われ、女性の職業として位置づけられてきた看護職に、着実に男性看護師が参入・増大するようになって以降、「女性看護師の皆さんへ

ケアする男の物語」¹⁶⁾や「いま、男性看護師を考える」¹⁷⁾などの特集号が発行されるなど、男性看護師に対する社会の関心は高まった。しかしながら、男性看護師からは、「何でも屋としての役割期待」がある反面、「男性看護師に対する認識不足」があることなどの指摘¹⁸⁾もある。

また、新しい医療として注目されている「性差医療」などの流れに代表される社会状況の中で、ジェンダー構造やケアの概念の変容とどのようにかかわっていくのか、その質的な変化を明らかにしていく研究が今後必要である。

II. 研究目的(作業課題)

本研究の目的は、小児看護領域における男性看護師の役割と意義を明らかにすることである。そのために、以下の作業課題をおいた。

- ① わが国における男性看護師、特に小児看護に従事している男性看護師の実態を明らかにする。
- ② 看護管理者が小児看護に従事している男性看護師をどのように捉え、認識しているのかを把握する。
- ③ 小児看護に従事している男性看護師が、どのような認識で子どもに関わっているのかを明らかにする。
- ④ 入院している子どもや家族および女性看護師が、どのように男性看護師を認識しているのか(期待や要望など)を明らかにする。

本稿では、作業課題①に対する研究結果を報告する。

III. 研究方法

研究デザインは、量的記述的研究であ

る。

1. 調査対象

全国の小児科診療を標榜する 400 床以上の病院、および小児専門病院の看護管理者計 547 名を対象に質問紙調査を行った。

2. 調査方法

郵送法による無記名自記式質問紙調査を実施した。

3. 調査内容

調査票の内容は、報告者が作成した病院の概要、男性看護師の配置状況および小児看護に従事している男性看護師の実態などに関する 14 項目を調査枠組みとして作成し、2 施設でプレテストを行った。小児看護領域に男性看護師を配置することについての考えは自由記述とした（表 1）。

表 1 調査内容

大項目	中項目	小項目	質問番号
病院のデータベース	病院の場所	所在地	1
		設置主体	2
	病院の規模	許可病床数	3
		実稼動病床数	4
	看護職員数	常勤の看護職員数、看護師数	5
	男性看護師数	男性看護師の有無と男性看護師数	6
男性看護師の配置部署		病棟および部署	7
		年齢	8
小児病棟に配置されている男性看護師	小児病棟の形態と規模	小児の病棟の形態	9
		病床数	10
		経験年数（小児病棟における）	11
	男性看護師の属性	職位	
		免許の種類	
	回答者の属性	最終学歴	
		性別	12
		年齢	13
		職位	14

4. 調査期間

調査期間は、2007 年 2 月～3 月に行った。

Excel 2003 に入力し、単純集計を行った。また、自由記述については、KJ 法を用いてカテゴリー分類を行った。

5. データ分析

回収した調査票の回答は、Microsoft

6. 倫理的配慮

調査の意図、データの処理・保管方法、

研究結果の公表（調査によって得られたデータはすべて統計処理を行い、研究以外に使用する目的がないこと）について、調査の理解と協力を文書で依頼し、調査票の返送をもって同意したものとみなした。

本研究は、女子栄養大学倫理審査委員

会の承認（第 244 号）を受けて行った。

IV. 結果

1. 回収率

調査票の回収率は、表 2 のとおりであった。

表 2 調査票の回収数（回収率）

病院種別	郵送数	回収数	回収率	有効回答数
一般病院	504	257	51.0%	242
小児専門病院	43	24	55.8%	23
合計	547	281	51.4%	265

*小児専門病院には、療育センターも含む

2. 調査対象とした施設の概要

調査対象とした小児科診療を標榜する

400 床以上の病院および小児専門病院の概要は、表 3 のとおりである。

表 3 調査施設の概要

	一般病院（n = 242） 平均 ± SD	小児専門病院（n = 23） 平均 ± SD	合計（n = 265） 平均 ± SD
許可病床数	602 ± 190	165 ± 102	564 ± 222
稼動病床数	566 ± 195	133 ± 89	527 ± 225
看護職員数	432 ± 171	135 ± 128	406 ± 188
看護師数	395 ± 157	119 ± 106	370 ± 173
男性看護師数	13.5 ± 10.5	6.6 ± 5.8	13.0 ± 10.4

3. 男性看護師の有無

調査に回答した 265 施設のうち、男性看護師が「いる」と回答したのは 254 施

設（95.8%）であり、病院種別ごとでは、表 4 のとおりである。小児専門病院のうち、3 施設はいなかった。

表 4 男性看護師の有無

男性看護師	一般病院	小児専門病院	全体
いる	234（96.7%）	20（87.0%）	254（95.8%）
いない	8（3.3%）	3（13.0%）	11（4.2%）
合計	242（100.0%）	23（100.0%）	265（100.0%）

*小児専門病院で男性看護師がいない施設は、すべて療育センターであった。

4. 男性看護師の配置状況

一般病院における男性看護師の配置場所は、表 5 のとおりである。手術室、集

中治療室、整形外科病棟と続き、外科系の病棟が上位を占めた。小児科病棟は透析室と並んで 8 番目であった。

表 5 男性看護師の配置場所（一般病院 n = 234 複数回答）

病棟（部署）	病院数
手術室	174 (74.4%)
集中治療室（救命センターを含む）	167 (71.4%)
整形外科病棟	132 (56.4%)
脳外科病棟	120 (51.3%)
内科系病棟	113 (48.3%)
一般外科病棟	107 (45.7%)
精神科病棟	60 (25.6%)
小児科病棟	54 (23.1%)
透析室	54 (23.1%)
その他の外科病棟	51 (21.8%)
外来	38 (16.2%)
新生児集中治療室（NICU）	16 (6.8%)
重心	5 (2.1%)
その他	51 (21.8%)

5. 小児看護に従事している男性看護師の概要

一般病院における小児看護に従事している男性看護師は 54 施設（23.1%）、総数は 85 名であった。男性看護師の属性は、

表 6 に示すとおりであった。看護師経験年数の平均は約 4 年、小児経験年数の平均は約 3 年であった。また、配置されている男性看護師は、表 7 に示すとおりであった。

表 6 男性看護師の属性

		施設数（構成比）
看護師経験年数（n = 85） 平均 ± SD 3.99 ± 3.58 最大 20 最小 1	～1 年	19 (22.4%)
	2 年～3 年	31 (36.5%)
	4 年～5 年	19 (22.4%)
	6 年～9 年	9 (10.6%)
	10 年～	7 (8.2%)
小児経験年数（n = 85） 平均 ± SD 3.06 ±	～1 年	22 (25.9%)
	2～3 年	35 (41.2%)
	4～5 年	18 (21.2%)
	6～9 年	8 (9.4%)

2.25 最大 11 最小 0.1	10 年～	2 (0.2%)
職位 (n=82)	看護師長 副看護師長 (主任・係長) スタッフナース	1 (1.2%) 2 (2.4%) 79 (96.3%)
免許 (資格) (n=85)	看護師 准看護師	84 (98.8%) 1 (1.2%)
看護基礎教育機関 (n=82)	大学院 大学 短期大学 専門学校 その他	3 (3.7%) 22 (26.8%) 14 (17.1%) 42 (51.2%) 1 (1.2%)

表 7 小児病棟に配置されている男性看護師数 (n=54)

男性看護師数	1 人	2 人	3 人	4 人	5 人
施設数 (%)	36 (66.7%)	10 (18.5%)	4 (7.4%)	3 (5.6%)	1 (0.2%)

6. 男性看護師を配置することについての考え

調査の回答者に、小児看護領域に男性看護師を配置することについての考えを

自由に記載してもらった結果、60 件の回答が得られた。その記載内容を分析した結果、表 8 に示すような 5 つのカテゴリーに分類された。

表 8 小児看護領域に男性看護師を配置することについての考え

カテゴリー	記載内容	件数
I 期待や肯定的意見	「患児や家族からも大変評判がよい。」 「小児領域には父性という意味でも男性看護師がいてほしい。」 「実習を受け入れている看護学校の男子学生の中には小児科を希望する人も増えてきている。」	21
II 否定的意見	「夜勤帯の思春期・児童のケアに影響がでている。」 「患者と 2 人きりにならないようにするために。」	7
III 病院の事情があり、配置していない	「小児科と婦人科が混合になっているので、小児科への希望はない。」 「母子入院の形をとっているので、原則的に男性の看護師は配置しない。」	7
IV 希望者がいない	「小児領域への男性看護師の配置は必要と考えて	7

	いるが、希望者がいないのが現状である。」	
V その他	「研究計画書があればもう少し理解できたと思います。」	18
合 計		60

V. 考察

1. 男性看護師の有無と配置場所

今回の調査から、ほとんど(95.8%)の病院に男性看護師が「いる」という結果であった。病院種別ごとにみると、一般病院では 96.7%、小児専門病院では 87.0%であった。今回の調査では、小児専門病院の中に一部療育センターを含んでいたため、このような結果になった。しかし、回答した小児専門病院には、いずれの病院においても男性看護師がいたが、療育センターには、「いない」施設が多かった。日本看護協会による病院看護基礎調査によると、男性看護師を配置している病院の比率は 1987 年の 28.8%から 1999 年には 58.9%と、わずか 10 年ほどの間に急激な上昇を示している。これが、特定機能病院に限定すると 1999 年には 82.9%の配置である^{19) 20)}。今回調査対象とした施設が 400 床以上と規模が大きかったことも影響しているが、男性看護師を配置している病院が着実に増加している²¹⁾ことを反映していると考えられる。

1 施設あたりの男性看護師数は、平均 13 人であった。看護師数の平均が 370 人に対する割合は 3.5%となった。看護師全体に占める男性看護師の割合が 4.7%と比較すると、決して多い割合ではなかった。

男性看護師の配置場所は、「手術室」、「集中治療室」、「整形外科病棟」の順番となり、「小児科病棟」は「透析室」とならんで 8 番目だった。「精神科」は 7 番目

であった。手術室、集中治療室はいずれも 60%以上を超えており、それに続いて整形外科病棟をはじめとする外科系病棟が約半数を占めた。1999 年における男性看護師の卒業後の配属場所では、「精神科」が 44%、その他 56%となっている²²⁾。今回の調査から、外科系を中心とした一般科への配置が多いとともに、内科系病棟の配置が半数を占めていることも特筆すべきことであり、配置場所が多様化していることが窺える。

病院の配置場所は、年度ごとに変化するため、全国規模の調査はなかった。配置場所は必ずしも希望通りにいくわけではなく、施設の状況に影響を受ける。本調査では、小児科病棟に配置されている男性看護師は 20%強であった。この結果について、先行研究との比較は出来ないものの、男性看護師が選択する場所が広がりを示しているといえるだろう。

2. 小児看護に従事している男性看護師の特徴

一般病院における小児看護に従事している男性看護師は 54 施設 (21.3%)、総数は 85 名であった。1 施設あたりの平均は、1.57 人となった。看護師経験年数の平均は約 4 年、小児経験年数の平均は約 3 年であった。看護師経験年数では、80%以上が 5 年未満であり、最大は 20 年であった。また、小児経験年数は、約 90%が 5 年未満と比較的経験年数が少ない集団であるといえる。

ほとんどの看護師は、スタッフナース

で、看護師の資格を持っていた。准看護師はわずか1名だった。

看護基礎教育機関は、専門学校が最も多く約半数（51.2%）であったが、次に大学卒（26.8%）となっていた。平成元年（1989）における大学数はわずか12校であったが、その後毎年増加を続けて平成18年（2006）には146校を数えるまでになった。約12倍の増加であり、卒業生数は330人から8,091人（99校）へと約22倍に増加している²³⁾。このように、近年の看護教育機関において、大学が急増していることが影響していると考え、今後さらに大学卒の看護師が増加していくと思われる。

3. 小児看護領域に男性看護師を配置することについての看護管理者の考え

調査の回答者に小児看護領域に男性看護師を配置することについて、自由記述してもらった結果、60件の回答が得られた。そのなかで、期待や肯定的な意見が1/3を占めた。その内容は、①患児や家族からの評価、②父性や父親役割としての期待、③小児科を希望する学生の増加に分類された。また、男性看護師を大いに増やすべきであるという意見もあり、その理由として、「患者さんの半分は男性。男性でなければ話せない気持ちがあるだろう。メンタルサポートに必要。」、「男性の客観的な判断力や冷静さなどを集団力学に生かしたい。」と記載されていた。これらは、男性看護師に特有の役割期待があると考えられる。

しかし、「思春期や児童のケアへの影響などがでている」という回答は、性差により女性患者の羞恥心をともなうケアを行いにくいといった先行研究²⁴⁾と同じ結果を示していた。「男子の看護学生の中には小児科を希望するものも増えてきてい

る」という回答は、小児看護を志向する男子学生が増加している現象であり、「精神科以外」が着実に増加している結果であるといえるだろう。

また、小児看護領域への男性看護師の配置は、小児病棟が混合病棟であるなどの構造上の問題や、希望者がいないといった問題があることから、個々の病院の状況に合わせて男性看護師の配置が行われていることが明らかになった。

VI. おわりに

全国の400床以上の一般病院、および小児専門病院の看護管理者を対象とした質問紙調査の結果から、以下の結論を得た。

1. 男性看護師を配置している病院は95.8%で、ほとんどの病院にいた。病院種別では、一般病院が96.7%と高く、小児専門病院は、療育センターを含んでいたため、やや低い結果になった。
2. 一般病院において、男性看護師は54施設（21.6%）に配置されており、透析室とならんで8番目であった。
3. 小児看護領域に男性看護師を配置することについて、看護管理者は期待や肯定的な意見がある反面、性差によるケアへの影響、病棟の構造上の問題、希望状況などの要因があり、個々の病院の状況に合わせて配置されていた。

今回看護管理者を対象にした実態調査から、男性看護師の配置状況および小児看護に従事する男性看護師の実態が明らかになった。小児看護に従事している男性看護師は、小児の経験年数が比較的短いということや、調査の対象が看護管理者ということもあり、そこから小児看護における役割と意義を見出すことは難し

い。今回は単純集計のみの報告であり、今後さらに詳しい分析を行っていく予定である。また、これらと併行して、看護管理者に対する面接調査、および男性看護師に対する面接調査を行い、小児看護領域における男性看護師の役割と意義を明らかにしていきたい。

文献

- 1) 厚生労働省：平成 18 年度保健・衛生行政業務報告（衛生行政報告例）結果（就業医療関係者）の概況，平成 19 年 7 月 27 日。
- 2) 日本看護協会出版会：平成 18 年看護関係統計資料集，医療施設就業者数，2006。
- 3) 日本看護協会：日本看護協会調査研究報告 1999 年病院看護基礎調査，42，2001。
- 4) 前田貴彦ほか：小児看護における看護師の必要性に関する研究（第 2 報）長期入院児とその親への看護に関する小児看護者の意識，三重看護学誌，4(2)；9-19，2002。
- 5) 前田貴彦，角田智哉，杉本陽子：入院中の患児への男性看護師の必要性和その役割認識に関する研究－入院中および入院経験のある子どもをもつ保護者への調査から－，第 35 回日本看護学会論文集 小児看護，2004。
- 6) 山崎裕二ほか：近代看護史のなかの男性看護者(1) 明治初期－10 年代の陸軍と博愛社－，日本赤十字武蔵野女子短期大学紀要，8；103-112，1995。
- 7) 北島謙吾：わが国における看護師養成の歴史と現状，こころの臨床，15(1)；43-47，1996。
- 8) 合田典子ほか：男女共同参画社会における看護教育－男子看護学生の動向について－，岡山大学医学部保健学科紀要，15；39-49，2004。
- 9) 本田千波，今井孝子：男子学生の母性実習に関する調査，母性衛生，30(3)；399-405，1989。
- 10) 波多野梗子，小野寺杜紀：看護師の就業と男子看護学生の教育の現状－K 県の実態調査をとおして－，看護展望，17(4)；445-452，1992。
- 11) 百田武士：男子看護者の抱える問題，看護学雑誌，62(3)；280-283，1998。
- 12) 矢原隆行：看護職におけるジェンダー体制の今日的状況－看護職者の意識と現状に関する調査から－，看護管理，14(2)；163-166，2004。
- 13) 山崎裕二：男性看護者の戦後史研究－証言で綴る「ジェンダーの看護史」の試み－，看護教育，47(11)；969-975，2006。
- 14) 前田貴彦ほか：小児看護における看護師の必要性に関する調査－長期入院児に対する小児看護者の意識について－，三重看護学誌，2；69-79，2000。
- 15) 前掲 2) 17。
- 16) 特集 女性看護師の皆さんへ－ケアする男の物語－，66(11)，2002。
- 17) 焦点 いま，男性看護師を考える，看護教育 増刊号，45(11)，2004。
- 18) 北林 司：男性看護師が認識する男性であることの特異性－X 県におけるインタビュー調査から－，看護学雑誌，66(11)；1022-1027，2002。
- 19) 日本看護協会：日本看護協会調査研究報告 1995 年病院看護基礎調査，44，1997。
- 20) 前掲 2)，42，2001。
- 21) 矢原隆行：男性看護職をめぐる課題と戦略－その隘路と可能性について－，看護学雑誌，66(11)；1006-1011，2002。
- 22) 明野伸次：男性看護師に対する業

- 務評価・役割期待についての文献的考察，北海道医療大学看護福祉学部紀要，11；95-100，2004.
- 23) 日本看護協会出版会：平成 18 年看護関係統計資料集，6-7，2006.
- 24) 袴田將嗣・岩田浩子：一般病棟における男性看護師の役割に対する管理者の意識の検討，第 34 回日本看護学会論文集 看護管理，408-410，2003.

〈 資 料 〉

調 査 票（一般病院用）

次の質問について、（ ）内には該当事項を記入し、選択肢が用意されているものについては、あてはまる番号に○をつけてください。

***はじめに、病院の概要についてお伺いします。**

問1 病院の所在地 （ ） 都 道 府 県

問2 設置主体について、あてはまる番号と設置主体それぞれに○をつけてください。

1. 国立（厚生労働省、文部科学省、独立行政法人、国立大学法人、その他）
2. 公的医療機関（都道府県、市町村、日赤、済生会、厚生連、その他）
3. 社会保険関係団体（全国社会保険協会連合会、その他）
4. 公益法人 5. 会社 6. 医療法人
7. 個人 8. その他（ ）

問3 病院の許可病床数 （ ） 床

問4 病院の実稼動病床数 （ ） 床

問5 常勤の看護職員数 （ ） 人 そのうち看護師数（ ） 人

問6 男性看護師はいますか。

1. いる （ ） 人 2. いない

*** 男性看護師がいない場合は、質問はこれで終わります。**

*** 男性看護師に関してお伺いします。**

問7 男性看護師の勤務している病棟について、あてはまるものすべてに○をつけてください。

1. 一般外科病棟 2. 整形外科病棟 3. 脳神経外科病棟 4. その他の外科病棟
5. 小児科病棟（成人との混合病棟を含む） 6. 新生児集中治療室（NICU）
7. 重症心身障害児（者）病棟 8. 精神科病棟 9. 内科系病棟
10. 集中治療室（救急部・救命救急センターを含む） 11. 手術室 12. 透析室
13. 外来 14. その他（ ）

問8 男性看護師の年齢について、（ ）内に数字を記入してください。

1. 20歳未満（ ） 人 2. 20～29歳（ ） 人 3. 30～39歳（ ） 人
4. 40～49歳（ ） 人 5. 50～59歳（ ） 人 6. 60～69歳（ ） 人

*** 小児病棟に勤務している男性看護師についてお伺いします。**

問9 小児の病棟は次のどちらにあてはまりますか。（重症心身障害児病棟も含みます）。

1. 小児の単科病棟 2. 成人との混合病棟

問10 その病棟の病床数は（ ） 床。そのうち、小児の病床数は（ ） 床。

1. 大学院卒 2. 大学卒（看護系、非看護系） 3. 短期大学卒（2年課程、3年課程）
4. 専門学校卒 5. その他

* 最後に、この調査にお答えいただいているあなたについてお伺いします。

1. 男性 2. 女性

1. 20~29歲 2. 30~39歲 3. 40~49歲 4. 50~59歲 5. 60~69歲 6. 70歲以上

()

--

14